

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

転生現代入り

【作者名】

xandra

【あらすじ】

外の世界に転生した博麗霊夢が、同じく幻想郷からの転生者レミリアスカーレットの双子の妹として生活する話。

何とかして幻想郷に帰ろうとあれこれするレミリアと、

別にこのままで良いんじゃないの、と飄々と新たな人生を謳歌するつもり満々な霊夢。

プロット無しでつらつら書いてるだけなので嘘粗筋になるかもです。

拙い文章ですが、程々に頑張ります。

1・転生

視覚も聴覚も、触覚すらもほとんどない。

空を飛んで風に身を任せているような浮遊感があり、それでいて湯船に浸かっているような心地よい身体の重みも同時に感じていた。

理由は解らないが、自分は恐らく死んだのだろう。

ならば今現在、私は冥界辺りを靈魂となつてふわふわ揺蕩っていると言つた所か。

半分も覚醒していないはつきりしない意識の中で、

「母親のお腹の中つてこんな感じなのかしらねー」などとぼんやりと考えていた。

そんな心地よい微睡みから、突然引き摺り出された。

私の名前は博麗靈夢　　ではない。
ではなくつた、と言う方が正しいか。

薄い膜で包まれたような、粘膜の中で眠っているようなあの感覚は、靈魂となつた状態ではなかった。

どうやら本当に母親の胎内だったらしい。

私は今、赤ん坊の姿をしている。

木の柵で囲われた子供用のお布団　　ベビーベッドというらし

い　　に身動きも取れず為す術もなく寝かされている。

あれから半年程経つた。

起きては泣いて母乳を吸い、満足したら寝る。お漏らししては泣い

て不快感が無くなれば満足して寝る。

などという非常に不規則な生活を繰り返していたせいで感覚が掴めずはつきりしないが、自分の体の成熟具合も考慮すると、大凡半年程だ。

それにしても赤ん坊の体というのは実に不便だ。

「ちょっと小腹が空いてきたわね」だとか、

「あ、背中が痒い！」だとか、

そんな下らないちよつとしたストレスですぐに泣き出してしまつ。感情のコントロールがまるで効かない。

何より苦痛なのが体が思ったように動かないことである。

「あー……べー……」

私のすぐそばから赤ん坊らしき声が聞こえてきた。

言い忘れていたが、今生の私は双子のようだ。

寢床が同じなせいもあり、この子には幾度となく貰い泣きさせられた。

耳元で突然泣き出すものだから、ビックリした私は釣られて泣き出してしまい何度も母親の手を煩わせることになってしまつのである。ごめんなさいねお母さん。

まあ、ほぼ同じ数だけこの子にも貰い泣きさせてしまっているであろうから立場は同じなんだけど。

と言つても、赤ん坊なんてものはなくのが仕事だしね。責めるつもりはないわ。

「しゅー……でー……えー……」

またこれか、と私は内心で溜息を吐いた。

この双子の姉（妹かも）は母親が近くに居ない間に頻繁に謎の呪詛を唱え始める。

最初のうちは単なる呻き声かとも思ったが、毎回同じ言葉(?)を話すのだ。

ちよつと気味が悪い。

なんというか発音が日本語的ではない。

近い物をあげるとするならば、生前聞いた覚えのあるパチュリー等魔法使いが魔法を行使する時の呪文か。

もしくは、レミリアが宴会で飲み過ぎた時にポロつと漏らす彼女の母国語かと思しき異国の言葉。

「んー……えい、びい、すい、でい、いい」

お、今日は少し変化があった。

それにしても、呻き始めた当初と比べるとかなりはつきり話せるようになってきている。羨ましい限りだ。

というか、なんというか聞き覚えのある文字列だ。

……これは確か、英語のいろはにほへとじゃなかったか。

「あー……るえ、れ、らりる、れ、ろ……うん」

ん？ 今らりるれろつて言った？

……まさか、発声練習してるんじゃないでしょうね。

日に日に発音がはつきりしてくると、なんだか耳慣れた言葉に聞こえてくる様な気がする。

もしかしたら、隣のコイツも私と同じ境遇の人間だったり

「Remilia ; Scarlett」

は？

発せられた言葉に、私の思考は寸断された。

心臓が跳ねた。全身がじんわりと熱くなつていくのが分かる。滲み出る汗が背中に不快な湿り気を帯びさせる。

コイツ、今なんと言った？

相も変わらず日本語的ではない発音だったが私は確かに聞いた。

私の隣でブツブツと謎の言葉を呟いていた赤子から発せられた言葉。

それは、私もよく知るある吸血鬼の名前。

レミリアスカーレット

2・前途多難

あれから一年程経過した。

私の双子の姉がレミリアだと判明したあの日以来、母親の見ていない時間を狙って毎日毎日発声練習を続けたおかげか、かなりはつきりと話せるようになっていた。

あの日、舌足らずな言葉ながらも懸命に話しかけた結果、なんとか私が博麗霊夢だということを伝えることが出来た。

とはいえ、まともに会話など到底出来る筈もなく

「まずはちゃんと喋れるようになりなさいな。ら行とな行が曲者よ。しっかり練習しておきなさい」

というレミリアの言を受け、ひたすらあいつえおの反復練習に勤しんだ。

「レミリア。……レミリア、起きてるっ」

現在時刻は恐らく亥の刻といったところか。

日が出てる間にバッチリ昼寝しておいたおかげで眠気はほとんどない。

母親が寝静まるのを見計らって、私は音をたてないように慎重に布団から這い出た。

転生者であるという事は親には隠し通すつもりなので、こつやっつてコソコソと行動するしかない。

時が来れば話すこともあるかもしれないが、出来る限り混乱や揉め事は避けたい。

そうそう、この家庭には父親は居ないらしい。母子家庭というやつだぞうだ。

警戒すべき相手が少ないというのは、こちらからしたらありがたい

い。

「ほら、レミリア起きなさい。……あーもう、あんたそれでも元吸血鬼
」？」

我ながら理不尽な言い分だという自覚はある。

「ほーらレミちゃん起きなさい」

母親のモノマネをしながらペチペチと頬を叩く。うむ、よく似てる。

レミちゃんと言うのはレミリアの今世の名前だ。どんな漢字なのかは知らない。

私の名前は前世と変わらずレイムだった。なんだか運命というか因縁めいた何かを感じる。

「夜中起きて話し合いましたようつったのはあんたでしょうが。言い出しっぺが眠りこけてどうすんのよ」

多少の恨みも込めて頬を軽く抓ると、レミリアの量瞼がパチッと見開かれた。

「ふちゃ……あ……」

あ、やっちゃった。これヤバイ。

レミリアの両目がどんどん潤んでいく。

あーゴメン！ 謝るから！ だから今は堪えて！ ね？ 良い子
だか

「ふぎぎゃあああああああああああああああああああ!!!」

「耳元で発生した突然の大音量に私の体がビクつと震えた。体の奥底から熱い何かが込み上げてくるのが分かる。」

「あー、これダメだ。こうなるともう止まらない。」

「ほら来た、あーもうダメだ、あ、あ、あー」

「コびゃあああああああああああああああああああああああ
!!!」

「誰も寝静まる真夜中に二人分の泣き声が木霊する。」

「幼児の身体というのはこれだから困る。頬を抓られた程度で泣き出すとは。」

「それよりも、泣き声に驚いて釣られ泣きしてしまう自分が情けない。」

「感情の急激な変化にどうしても耐えられないようだ。」

「あーもう……。はいはい、どうしたのー？」

「母親が起きて来てしまった。いつも夜中にゴメンねお母さん。」

「そう、実は夜の密会を計画して失敗したのは今月だけでももう五回目なのだ。」

「ちなみに、私の方が起きてレミリアを起こそうとするのは今回が初。」

「普段はレミリアが私を起こそうと声をかけるが、なかなか起きてこないで悲しくなって泣き出すというのがいつものパターン。」

「全く、幼児はこれだから。」

「はいはいはいはい。ママはいいですよー」

「眠そうな顔で私を元の布団に寝かせると、今度はレミリアを抱き上げながら、私のお腹をポンポンと優しくたたく。」

「なんとも情けない話だが、私はこれが心地よくて結構好きなのだ。」

前世での私は母親というものを知らずに育ったが、この人は優しく良いお母さんだと思う。

……ただ、可愛がってくれるのはありがたいが、昼間は私達にベッタリなので、なかなか二人きりの時間というのが取れないのは考え物だ。

レミリアとゆっくり話が出来るのはまだまだ先かな。

泣き疲れて眠くなってきた頭でぼんやりとそんな事を考えた。

3・夜の密会

「……お母様、ちゃんと寝てる？」

「ん……そうね、しばらく大丈夫だと思うわ」

寝息をたてるお母さんの顔を確認して、ふうっと一息つきレミリアに向き直る。

「漸く二人つきりでゆっくり話せるわね」

「そうね、誰かさんのせいで今まで出来なかったものね」

上目遣いでレミリアが睨んでくるが、容姿のせいか何だか媚びてるようにも見える。責められてる気がまるでしない。

私が無反応なのを見ると、レミリアは肩を竦めた。

「まあいいわ。まずは現状把握から始めましょうか」

私達は二歳になっていた。

流石にこの位の歳になると、身体の動かし方や生活リズム、感情等のコントロールも多少は出来るようになってくる。

そのお陰でようやく二人きりの時間を作る事が出来たのだ。

「現状把握も何も、死んで転生したってことですよ？ 何で記憶を保持したままなのは解らないけれど」

「それも不可解だけど、どうしてあなたと双子で生まれてきたかって事の方が問題よ」

言って、眉を顰めながら腕を組むレミリア。

胡座を組んでいることも相まって、幼い見た目に似合わずおっさんくわい。

「何よ、私だってあんたと双子なんて死んでも嫌よ」

死んだからこそこうなっているんだけどね。

実際は別にそれほど嫌というわけではなかった。むしろこの不可解な現象の前では友人が傍に居てくれるのは非常に心強い。

が、それを伝えるのはなんだか癪である。

「あ、ごめんなさい。そういう意味じゃないのよ。私はあなたと家族になるっていうのは大歓迎よ？ ……ただ、何か意味があるんじゃないかって事」

大歓迎で。

何だかむず痒い気分になるのを誤魔化す為に、枕元に隠しておいたビスコを口に放り込む。

結構美味しいのよこれ。

「それは結構普通の事じゃないの？ ほらよく言うでしょ、”深い関わりを持った相手とは、前世で既に出会っている”とかなんとか」
「物食べながら喋るのやめなさいよ。 ……あーほらもうポロポロ零してる…」

身を乗り出して私の寝巻きの裾をパンパンとはたいて零れたカスを床に落としていく。

あんたは私の母親か。

あ、そついえば姉だったか。

「とつか何でこんな物持ってるのよ」

「昼間お母さんが廁に行ってる隙にちよろっと。 ああ、あんたその時昼寝してたわね」

ちなみにこの手のおやつの隠し場所は台所の流しの下の物置だ。
観音扉の内側には包丁がズラリとぶら下げられている。
包丁収納扉というらしいが、何故あんな乳幼児の手が届く高さに危
ない物を設置するのか甚だ疑問である。

「そもそもこれは異変なんじゃないの？ 博麗の巫女としてはどう考
えてるのかしら」

「異変を解決する側である巫女を強制的に転生させる異変？ はっ、
スperlカードルールも糞もあつたもんじゃないわね。誰に退治して
貰おつていうのよ」

それじゃあ異変じゃなくて侵略よ。と付け加え、新たにビスコを口
に放り込んだ。

……この緑色の方は不味くは無いかどあんまり美味しくないわね。
やはり緑は敵なようだ。

「だったら余計に拙いんじゃないの？ 博麗の巫女不在の現状は」
「紫がなんとかするでしょう。巫女不在時の異変だつて、前例が無い
わけでもないし」

まあなるようになるでしょう、と呑気な言葉を吐きながら更にビス
コに手を伸ばす。

なんかクセになるわねこれ。止まらない。

「それ一個頂戴よ。……ありがとう。」

それで？ 博麗の巫女様としてはどう動くつもりなのかしら？ 「

私を手渡した緑ビスコを咀嚼しながら

「あら美味しいわねこれ」などとのたまつレミリア。
なら全部くれてやるわ。

赤い方は一つもやらんがな。

「わ、ちょっと投げないでよー」

レミリアの文句を無視しつつ、

「もう一年以上も経ってるのよ？ それこそ紫が放っておかないでしようよ。とっくに新しい巫女が据えられてるはずだわ」

「へえ……随分とあいつを信頼してるのね」

レミリアはそう言うと、僅かに目を細めた。

吸血鬼異変の事もあるし、あいつに何か思う所でもあるのだろうか。

「してないわ。あいつの手腕を信用はしてるけどね。ムカつくけど、人を見る目と腕は確かなのよね」

そして何より、幻想郷を想う気持ちは誰よりも強い。

レミリアは、そう……。と小さく呟くと咳払いを一つして、

「ところで、死んだ時の事を覚えてる？」

「死んだ時ねえ……それが何も覚えてないのよね。最後の記憶は……えーっと。なんだっけ。思い出せないわね」

別に最近妖怪と戦ったという記憶も無いし。

案外縁側でのほほんとお茶でも飲んでたかもね。

あー、熱いお茶が飲みたい。

ミルクも麦茶ももう飽きた。ポカリとかいうのは甘くて美味しいけど。

今はビスコで我慢しましょう。あ、あと二つしかない。

「私も最後の記憶って何だか曖昧なのよね。私の能力じゃあ過去は見れないし。」

……咲夜の紅茶が恋しいわ。今頃皆何してるのかしらね」

頬杖をついて窓の外に目を向けるレミリア。

儂げなその横顔は、前世とは違い日本人然としている。

だが、スツと通った鼻筋等はかすかに前世の面影を感じさせる。魂の影響だろうか。

目を眺めるその姿には、かつての夜の帝王としての威厳はもう無い。

元々あんまり無かったけどね。

「え、ちょっと待って。聞き流しそうになったけどあんた能力使えてるの?」

「……え? ええ、使えてるわよ? かなり弱体化してるし、安定しないけどね。あなた自分の能力試してないの?」

試していない。当初はそれどころじゃ無かったし、ここ最近は滑舌を良くする為の訓練とおやつ盗み食いで忙しかったのだ。

「……信じらんないわね。真っ先に試そうとする物じゃないの? 普通」

やれやれと言った風に量掌を上に向けたため息を吐くレミリア。
オーバリアクションがなんかムカつく。

「ちょっと今試してみなさいよ」

「ん……もうやってるわ。あー……でも、駄目ね。なんとなく存在は感じるんだけどね」

ふうっと息を吐き、

「この体、霊力が殆ど無いのよ。赤子だからって事もあるんですけど、それにしてもこの霊力の低さは異常だわ」

それでも、何と無く体が軽くなったような気がする。

この分じゃあジャンプの飛距離を少し伸ばしたり、高所から飛び降りた際の衝撃を緩和する程度にしか使えないだろう。

「私も魔力や妖力がまるで無いわ。空を飛んだり魔力弾を出したりも勿論出来ないわ。まあそれは人間になったからって事なんでしょうけど。」

あなたの異常な霊力の低さっていつのは、ここが外の世界っていうのが影響してるんじゃないかしら」

「やっぱり外の世界よね、ここ。ざっと見回しただけでも見たことの無い機械がいっぱいあるし」

テレビとか電灯とかね。

何より水道というのはとても便利だ。わざわざ汲みに行かなくとも蛇口を捻れば水が出てくる。近代文明万歳。

「で、あなたの能力の方はどうなのよ」

「駄目ね、殆ど使い物にはならないわ。言うなれば、運命を見る程度の能力」って所かしら。干渉はほぼ無理よ」

「未来予知ってこと？ 充分使えるじゃない」

「それがそうでも無いのよ。使おうとしても発動するかは三割程度。

発動したとしても靄がかかったように不鮮明にしか見えないし」

「つまり現状打破する術は無し、と。あーなんか面倒くさくなってきたわね」

脱力して足を前に放り出し、天井を見上げる。

小さなオレンジ色の光を発する電灯が少し目に痛い。

「そんな事言わずに何か考えてちょうだいよ。そんなんじゃない、いつまで経っても帰れないわよ」

「もつこのままで良いんじゃないかしら。ちょっと大人びた子供として普通に人生を謳歌しましょ。」

「……あ、ビスコがもうない」

投げやりな気分になった私は、空になった大袋を脇に放り投げる。くそ、緑の方全部レミリアにあげるんじゃないかった。

「やっぱりそれちょっと返して。どうせそんなに食べないんでしょ」
「？」

言いながら、返事も待たずにレミリアの足元に散らばるビスコを二つ程回収した。

「……レミリア？　どうかしたの？」

当然文句が飛んでくるかと思ったがそんなことはなく、怪訝に思いながらレミリアの方に顔を向けた。

「……あなたは、それで良いの？」

なんて顔してんのよ、あんた。

思わずそんな言葉が口から漏れそうになったが、何とか飲み込んだ。
だ。

前世でも今世でも、レミリアのこんな表情は見たことがない。

これが、あのレミリアなのか？

この優しく触れなければ壊れてしまいそうな弱々しい女の子が？

赤子が親に助けを求める自衛本能として泣き喚いているのではない。

嗚咽一つ漏らさず静かに涙を流す姿は存在そのものが儂げで、心の奥底に押しやっていたであろう弱音をさらけ出している。

レミリアの本当の姿を、見てしまった気がした。

「私は、嫌よ。こんな何処だか解らない場所に、人間として放り出されて、一生を終えるなんて」

「……レミリア」

ポツリ、ポツリと呟くように話すレミリアに私は何と声を掛ければ良いのか。

一人でそんなに溜め込んでいたのね

気付いてあげられなくてごめんなさい

軽はずみな発言をしてごめんなさい

頭の中に沸いては消える言葉の全てを飲み込んで、

「……おとど」

私はレミリアを抱き寄せた。

抵抗することもなく、素直に身を預けてくれたレミリアは、私の背中に手を回す。

「ありがとう」

どづいたしまして。

いや、違う。私が今伝えるべき言葉はこれじゃない。

側にあなたが居てくれたからこそ、私はこんなにも落ち着いていら

れるのだ。

もしもこの世界に一人ぼっちだったならば、今のあなた以上に取り乱していたかもしれない。

気が、狂っていたかもしれない。

それを救ってくれたのは、紛れもなくあなたなのだから。

だから、私の言うべき言葉はこれ一つだ。

「私の姉として、生まれてきてくれて、ありがとう。」

4・公園「デビュ」

「ああ……霊夢、太陽よ」

「そうね、日差しが強くてちょっと眩しいわね」

靴を履く為に爪先を地面にトントンと当てながら、なにやら感動しているレミリアに適当に返事をする。

「太陽が、日の光が、私の体を照らしているわ」

「お母さん、ちゃんと鍵閉めた？」

「ん、オツケーよ霊夢ちゃん。んじゃ行こっか」

なにやらポエムチックなことを呟くレミリアを無視して、お母さんと短く言葉を交わす。

あなたはホントすっかりしてるねー、とお母さんに頭を撫でられた。照れ臭いので辞めてほしい。嬉しいけど。

「ねえ見て霊夢！ 私！今！ 日の光を浴びてるのよー！」

ついには叫び出して玄関先で両手を広げて空を仰ぐレミリア。

叫ぶな、近所迷惑だ。

「お？ おお……。そんなに嬉しいかーレミちゃん。こりゃもうちょっと早く連れ出してやるべきだったかな」

未だかつてないレミリアのはしゃぎっぷりに弱冠引きつった笑顔を浮かべるお母さん。そりゃ引くわ。

初めてのシャワーの時も大概酷かったが、これはちょっと比じゃないな。落ち着くまで時間がかかりそうだ。

乳母車に乗せられずにする外出は、今回が初めてのことだ。あれには確か日除けの為の天井のような物が着いていたので、私達が日光をまともに浴びるといふのは考えてみれば初めてか。

家から歩いて五分程の場所に公園と呼ばれる子供の為の遊戯場があるらしい。

「あんたらもう三歳だし、そろそろ外で遊びたいでしょう。連れてったげる」といふお母さんの発案の元、私達はその公園なる場所に向かう為に出している。

「うふふふ、ねえ見てお母様。影が出来てるわ」

「そのお母様ってのやめてくんないかなあ。どこぞのお嬢様でもあるまいし」

何処で覚えてきたんだか、と溜息を吐くお母さん。

実際お嬢様だったんだよなあいつ。

あのワガママお嬢様レミリアの母親かあ……この先苦労するんだろつなあなどと他人事のように考えていると、公園の入り口が見えてきた。

「遊具は……まだちつと早いかな。ほれ、そこに砂場があるからお山でも作って適当に遊んでいい」

公園の中には、私達と似たような親子連れが数組居た。

子供達は園内を好き勝手に遊び周り、母親連中は一箇所に固まり何やら談笑しているようだ。

お母さんは私の頭を軽く撫でると、ちよつと行ってくるわと小さく

言って母親集団の元へと赴いた。その横顔が何故か緊張した面持ちであったが、私の気にすることじゃないだろう。

「太陽よ！ 私を祝福しろ！」

未だ高揚したままテンション高く叫ぶレミリアが鬱陶しいので軽く頭を叩いた。

レミリアがこちらを振り返り恨めしそうに見つめてくる。

「……痛いわね、何すんのよ」

「嬉しいのは理解出来るけどね、そろそろ落ち着きなさい。あんた注目浴びてるわよ」

私の言葉にハツとして辺りをキョロキョロ見渡す。不思議な物を見るような目が自分に向けられているのに気付いたようで、咳払いをして居住まいを正した。

「ごめんなさい、落ち着いたわ。もう大丈夫よ」

「ほんと、頼むわよ。私まで変な目で見られるんだから」

「ねえ、霊夢。……空も飛べない、魔力も無ければ腕力も無い、脆弱な体に脆弱な精神。」

……人間ってなんて不便な生き物なんだろうと思っていたけれど、人間になって良かったと今初めて感じたわ」

目を細めて空を見上げながら、感慨深そうに呟くレミリア。なんと
いつか芝居がかってて態とらしい。

私は呆れた様な表情を作りながら、

「あんた初めてシャワー浴びた時も似たようなこと言ってなかった？」

「人が折角感動してるのに水を差すんじゃないわよ」

ジトツとした目で睨んでくるレミリアを無視してこの後の事を考える。

とりあえず何をしようか。言い付け通り砂場ででも遊んでようかな。面白くもないだろうが。

私としては正直さつさと家に帰って縁側でお茶でも飲んでいたいのだが、折角連れてきてくれたお母さんの手前そういう訳にもいかない。

鉄の棒を幾重にも繋ぎ合わせ立方体を重ね合わせたような珍妙な物体や、梯子を登って鉄板を滑り降りるだけという何の意味があるのかわからない遊具には然程興味も無い。

「レミリア、何かしたいこととかある？」

「弾幕ごっこでもしましょうか」

「あら、良いわね」

え？ とレミリアが驚いたような表情でこちらを見る。

「出来るわけではないでしょう」だとか、そんな言葉を期待していたんだろう。突っ込み待ちとは相変わらず面倒臭い奴である。

私はその場にしゃがみ込み、足元の砂利を両手一杯に握りしめ不敵な笑みを浮かべた。

「言い出しつぺはあんただからね。まさか今更やっぱり辞めるなんて言わないわよね？」

「え、ちょ、ちよっと！ 待って霊夢！」

「食らえ！ 夢想封印！」

両手の砂を力一杯レミリアに投げつけた。夢想封印でも何でもない、要するにただの砂かけである。美しさの欠片も無い。

「わぶ、ちょ、口の中に入ったわよー」

ぺっぺっ、と口内に侵入した砂を唾と一緒に吐き出した。
服に着いた砂を払いながら憤慨した様子で、

「いきなり何てことすんのよ！ 見てよこれ砂まみれじゃない！」

「あーやっぱりか。一瞬だけみたいね。で、自覚は無し。」と

怒りを露わにするレミリアを無視して、彼女の全身を観察する。

腕を組んで一人で考え込む私に、レミリアは訳が分からないといった様子で、

「はあ？ 何の話よ!? それよりこの服どうしてくれんのよ！」

「何でもないわよ。それより、被弾は被弾よ。私の勝ちね」

「うん……っ！」

靴を滑らせ、蹴り上げるようにして足元の砂利を私目掛けて飛ばしてきた。

咄嗟に後ろに下がったがあまり効果はなく、私の下半身は見事に砂まみれとなった。

黒のスカートは砂埃で白く変色し、靴の中にも砂が入り込んだよう
で足の裏から異物感が伝わってきた。

これは何とも……イラっとするわ。

「……何すんのよ」

自分の事を棚に上げてレミリアを睨みつける。大丈夫、自覚はあるから私は悪くない。

「被弾したな？ これで一勝一敗だ」

あ、口調が変わってる。これは本気で怒ってるな。面倒臭い事にな

りそつだ。

血走った目を見開き凄惨な笑みを浮かべながら、レミリアは右の手刀を構えた。

「第3ラウンドと行「っ」じゃないか」

かくして、私達の公園デビューは姉妹の殴り合いで幕を閉じるという悲惨な結果になった。

尤も、三歳児の取っ組み合いなど程度が知れると言うもので、すぐさま駆けつけたお母さんにあっさりと取り押さえられ、姉妹二人して長々と説教を受ける羽目になった。

「私の公園デビューが……！」などとお母さんが頭を抱えていたのだが、

話を統合して推察するに、母親にとっての公園デビューと言うものは母親同志の横の繋がりを確立する為の一大イベントらしい。

成る程これは悪いことをしたなと罪悪感を覚えたので、私達にしては珍しく素直に説教を聞き続けた。

「ふふふ……ねえ霊夢。私今シャワー浴びてるのよ」

「見りゃあ分かるわよ気持ち悪いわね」

湯船の縁に腕と頭を乗せながらぞんざいに返事をする。

恍惚とした表情でシャワーを浴びるレミリアの姿は、今となってはもう珍しくもない見慣れた光景である。

まだ日も高くお風呂に入るにはかなり早い時間帯ではあるが、私達二人が泥だらけになってしまったので帰宅早々入浴する運びとなったのだ。

のぼせそうなのでそろそろ上がりたいが、この体だと一人で湯船から出るのは少し骨だ。

私を湯船に入れてくれた張本人であるお母さんは、シャワーにはしゃぐレミリアの相手で手一杯である。双子の育児って大変。

「昔はあんなに嫌がってたのにねえ」

感慨深そうに呟きながら、レミリアの全身に付いた泡を流す為にシャワーを浴びせるお母さん。

どことなく楽しそうだ。子供の成長が嬉しいと言った表情だが、実はそうじゃないのよお母さん。言わないけど。

吸血鬼は、流水によって浄化されてしまう。

その記憶が魂の髄まで刻まれているレミリアにとって、初めてのお風呂というのがどれ程の恐怖だったのかというのは想像に難くない。溶岩の中にもぶち込まれるような気分だったんだろうか。まあどうでもいいけど。

「それが今じゃあこれだものね。そろそろ鬱陶しいわ」

「あんたらってほんと早熟よねえ……お母さんとしては楽で良いんだけど。あ、頭流すよー」

この所、毎晩毎晩これである。

吸血鬼であったが故に前世では出来なかったことが出来るようになったのが嬉しいのは理解できるが、良い加減に慣れてほしいものだ。

「で、結局喧嘩の原因ってなんだったの？」

「霊夢が悪い」

お母さんの質問に対してどう言い訳したのか、と考えに耽る間も無く即座にレミリアが言葉を挟んできた。

まあ、確かにあれは私が悪いわ。素直に謝っておこう。

「そうね、悪ノリが過ぎたわ。ごめんねレミ姉」

そんな私の態度がレミリアにはあまりにも意外だったらしく、

「そ、そう……分かれれば良いのよ」などとともによもよもいながら引き下がった。

レミ姉、と言うのは母親の前でレミリアを呼ぶ時のあだ名の様な物だ。

以前すっかりレミリアと呼んでしまった時にお母さんに不審がられてしまったので、最近は特に気を付ける様になっている。

ちなみに正式には「麗美」と言うらしい。麗しく美しい。良い名前だと思っ。

「あ、そういえば。霊夢、腕大丈夫？ 引っ掻いちゃったけど血とかが出てない？」

「あーちょっと染みるけど大したことないわ。すぐ治るだろうし気にしないで」

右腕を上を持ち上げてプラプラと振って見せる。三本の赤い線が前腕部分に短く走っているが、ミミズ腫れと言う程でもなく数日もあれば治るだろう。本当に大したことはない。

「あ、お母さん。私ちよっとのぼせてきちゃった」

「あら大変」

よつこいしょつと！ 等とおつさん臭い掛け声を発しながら私を持ち上げて湯船から出してくれた。もつと言動をお淑やかにすれば良いのに。折角美人なんだから。

「先が上がっても良い？ 部屋で涼んでおくわ」

「んー、一人はちょっと心配ね。ちゃんと体拭けんの？」

「私も三歳よ？ その位は出来るわ」

「ほんと成長の早い子ねえ。お母さん嬉しいような寂しいような……」

「そこは素直に誇つといて頂戴よ。じゃ、お先に」

レミリアはとんでもなく長風呂だからね。付き合わされちゃたまらない。

あの調子なら後二十分は出たがらないだろうなあ。母親って大変。

「着替えはいつもの所に置いてあるからねー！」

引き戸の向こう側から聞こえてきた声にありがとつと返して脱衣所を後にした。

「で、あれ何だったのよ」

「あれって何よ」

念願の暖かい緑茶に舌鼓を打ちながらレミリアを見やる。

ちなみに自分で淹れた物である。電気ポットというのは非常に便

利だ。火を使わずともお湯を沸かせるとは、外の世界の技術には本当に舌を巻く。

「私に砂ぶっかけた後に何か一人で納得してウンウン言ってたじゃない」

扇風機の前に胡座をかいて座り込み、バスタオルで頭を拭いて乾かすレミリア。

扇風機よりドライヤー使えば良いのに。あれ便利よね。外の世界万歳。

もし幻想郷に戻るようなことがあれば河童に色々作って貰おう。多分そんな機会は来ないだろうが。

「ああ、あれね」

チラリとレミリアに向かって風を送る扇風機を見やる。ちょうど良いか。

湯呑みをテーブルの上に置き、レミリアのすぐ目の前まで移動する。

油断させる為に笑顔を作ってニコツと微笑みかけた。

キョトンとした表情のレミリアの顔の前で、私は、

力一杯両掌を重ね合わせた。

「きゃあー！ ちょっとなにす……」

パンツと小気味良い音が響いた。所謂猫騙しである。

レミリアの文句は途中で止まり、驚いた表情そのままに、視線は扇風機へと向けられた。

「あれ？ 動いてるわよね……。あ、戻った」

「どっつ？ 感じた？」

「え、ええ……。えっと、よく分からないんだけど、扇風機の風を一瞬感じなかったわ。」

扇風機が止まったのかとも思ったけど、むしろ風が体を避けて通つてるような……」

「そうね、一瞬だけど靈力の膜が出来てるわ」

かなり弱いけど靈力の防護膜ね、と言いながらさつき置いた湯呑みを手に取り口にする。

あ、くそ。ちょっと冷めてる。

「え？ 靈力？ ……私が？」

「そりゃ今は人間なんだから靈力くらいあるでしょうよ。あんたは元吸血鬼だから感じにくいかもしれないけど」

「ふうーん……へえー……」などと間の抜けた声を出しながら、レミアは両手を広げたり握ったりしている。

「うーん、扱い方が全然分からないわね。その靈力の膜っていうのも出そうと思っても出せないし。」

どうやって操作するの？「これ」

「私が初めてあんたのそれに気付いたのは今日外出した時のことよ。日光浴びた瞬間ね。……本当に一瞬だったから気のせいかとも思っただけ。」

次が私が砂を投げつけた時。つまりは身の危険を感じた時に一瞬だけ靈力が高まるって所かしら」

このレベルだと何に使えるだろう。風除けくらいだろうか。

しかし空も飛べない今の体だと風除けなんて使い道あるのだろうか。

うーん、自転車乗ってる時、か？ まだ乗った事ないけど。あれ

ちょっと乗ってみたい。楽しそうよね。

「あの砂かけにはそういう意味があったのね。

……いやいや、そうじゃなくて自分の意思で扱うにはどうすればいいかって聞いているのよ」

「そう言われてもねえ……魔力扱うのと似たようなもんじゃないの？
魔力なんて使ったことないから分からないけれど」

前世でも私はなんとなくでしか使って無かったので、いざ使い方を教えると言われても返事に困る。

霊力を扱う為の修行などしたこともない。呼吸の方法を教えると言われるような物だ。

「ご飯出来たよー！ テーブルの上片付けてー！」

レミリアと二人でうんうん唸っていると、台所からお母さんの声が響いた。

霊力講座はまたの機会になりそうだ。

5・靈力講座

蝉の音が閉め切った窓からも侵入しており、陽炎の様に歪む景色も相まって家の外の気温の高さが窺える。

庭の垣根の隙間から見える通行人の汗まみれな表情が、まるで別の世界の住人の様に思えた。

ああ……エアコン、便利だわあ。科学って素晴らしい。

あまり裕福では無いらしい我が家としては珍しいことに、今日はエアコンが解禁となっていた。

あまりの暑さにお母さんが音をあげて、エアコンの効いた涼しい寝室で昼寝を取っている。

自分だけ使うなんてずるい！ という私達姉妹二人の駄々捏ねを受け、渋々と言った感じではあったが居間のエアコン使用の許可が降りた。

まあ何が言いたいかと言うと、久しぶりに私達二人だけの時間がゆっくり取れるのである。

前世トーク 他人には聞かせられないような話を便宜上私達はこう読んでいる には持ってこいだ。

折角なので、私達は昨日中断してしまった靈力講座の続きを行っていた。

「ええー……何それ。全然分かんない」

「だからあー、これを、こっつして……こっつよ」

床に両手を着いて頂垂れる様な姿勢で顔だけこちらに向けるレミリアに向けて、極々弱い靈力弾を撃ってみせた。

しかしその靈力弾はレミリアの顔に当たる手前で力尽きた様に

萎んでいき消えて無くなる。

極々弱い、というのは何も力を抑えたという訳ではない。流石に全力という事はないが、七割程の力を込めて撃つたのにコレである。妖怪退治には使い物にならないな。

「いや、だから！ その霊力を手に収束させるのと、手から放つ方法が分からないって言うてるのよー！」

苛立ちを隠そうともせず私に私の説明不足に文句を飛ばしてくる。ついでに唾も飛んでくる。汚いわねこいつ。

折角教えてやってるといふのに何だその態度は。夢想封印してやるつかしら……出来ないけど。

「あんた前世で魔力弾とかバカス力撃ちまくってたじゃない。あんな感じでいいのよ」

「魔力とは全然勝手が違うのよ。そもそも自分の中にある霊力の感覚も上手く掴めてないし」

思わず、はあ？ と声が出た。

私は自身の霊力を自覚すると同時に、前世と同じように殆ど違和感も無く扱うことが出来たので、てっきりレミリアもある程度は扱える物かと思っていた。

呆れた様な、驚いた様な複雑な表情を自覚しながらレミリアに細めた視線を飛ばす。

「何よ、まだそんな段階なの」

「……悪かったわね」

親に不出来を咎められた子供の様にそっぽを向いて不貞腐れるレミリア。

別に攻めてる訳ではないのだが、窘めるのも面倒臭い。

「ならどつすれば良いのよ」

「どつしよつかしらね」

口をへの字に曲げたレミリアの視線から逃げる様に目を逸らす。
本当にどつしよつか。

何度も言うが私は今まで全て何と無くでやってきたのだ。加えて人に物を教えた経験など無い。

どつしよつ、適当な事言っつて誤魔化すしかないか。レミリアだつて馬鹿じゃないし、自分で勝手に修得してくれるでしょう。

「んー、そうね。なら、意識して自然体で居られるように練習しましよつか。感覚掴むにはそれが一番手っ取り早いわ」

「意識して自然体……？」

「自然体である事が最も力の消費が少なく済むのよ。初心者が下手な事をすれば無駄に霊力を消費してすぐ枯渇するわ。」

霊力が無くなると、流石に死ぬつて事はないけど抵抗力が弱まつて病気に罹りやすくなつたりするし」

おお、口が回る回る。

面倒臭くなつたので適当な事を言つてるだけなのだが、なんだかそれっぽい説得力がある気がする。うん。流石私。

「人間つて不便ねえ」

レミリアが哀れむように細めた目を此方に向けてきた。

格下の生物を蔑むかの様なその所作は、吸血鬼である前世の姿を彷彿とさせる。

「今はあんたもその人間なんだからね。よく自覚しときなさいよ。無茶するとあっさり死んじゃうのが人間なんだから」

「分かってるわよ。忠告、素直に受け止めておくわ。」

「……それより、”意識して自然体でいる”って具体的にどういうことなのよ」

「そうねえ……どう説明すればいいのかしら」

人差し指を顎に当てて天井を見上げながら考え込む。

最近どうも癖になっているこの動作だが、考えてみればこれはお母さんがよくやる仕草だ。無意識に真似していたのだろうか。やっぱり幼児なんだなあ。

「……じゃあ、まず深呼吸してみてください」

「はあ？ 何だよ」

良いから、と言ってレミリアに深呼吸を促す。

前から思っていたのだが、こいつは理屈や理由なんかをキチンと説明しないと納得しないタイプだ。大抵の事は”何と無く”で済ませてきた私とは、あまり相性が良いとは言えない様である。

そんな事を考えていると、レミリアの深呼吸が三回目に入ったので私は掌を向けた。

「ん、もう良いわ。じゃあ次は”普段通りに”呼吸してみてください」

これに一体何の意味があるんだ、とでも言いたげなレミリアだが、文句も言わずに素直に従ってくれた。

「普段通りね。……あ、あれ？」

普段通りに、と指示を出したにも関わらず、レミリアは小さく深呼吸を繰り返す。

しかしそれを咎めたりはしない。何しろそうなるのが狙いだっただの。

「……ああ、成る程そういつい」とね
「理解が速くて助かるわ。意識し出しちゃうと、自然体って分からないくなるでしょ？」 霊力も同じよ」「

「私っていつもどうやって呼吸してたっけ？」等と考えてしまい、不自然な呼吸になる、というのは誰しも経験があると思う。

私の話を聞いているのかいないのか、レミリアは未だ「すうーはあーすうーはあー」と呼吸音を鳴らしている。

「いや、それはもう良いから。」

じゃあ次は霊力の方に意識を向けてみましょうか」「

やっと本番ね。とレミリアが顔を綻ばせたが、その嬉しそうな表情は眉根を寄せる事によってすぐさま消え去った。

「それがよく解らないのよねえ……。前世では、勝手に魔力が溢れてきてたからそれを無造作に解き放ってただけだし」「

「魔力に関しては私は専門外だからよく分からないけど。」

……そうね、生命力の源みたいなのが全身を巡ってるのをイメージして頂戴。

その流れを掴むように、心の奥底を探るように……力の流れを感じ取ってみて」「

私が言い終えるよりも前に、レミリアは目を瞑り胸に手を当てて意識を集中させていた。最後まで聞けよ。

まあいいか。どうせ長くなるだろうしお茶でも淹れて来ようかな。

「ん……何か見えてきたわ」「

ええー……速過ぎよ。

内心文句を垂れながら浮かせ始めていた腰を下ろした。

お茶くらいゆっくり淹れさせてよ。優秀過ぎるのも考え物だわ。

「なんだか、血液……みたいね。全身を巡る、というよりも循環？　してるみたいな。魔力とは随分と感触が違うのね」

前世で似たような力を使っていたという事もあってか、その成長は私が思っていたよりもかなり速い物だった。

直感で出来なければ修得にはかなり時間が掛かると思っていたのが正直な所である。

吸血鬼なんて生まれ持った力を無造作に振るうだけの存在かと思っていたが、こんな繊細な芸当もこなすことが出来たのか。

「よし、じゃあその感覚をよく覚えておいてね。

……そのまま動かずにじっとしてなさいよ」

右手に意識を集中させ、掌に靈力を纏わせる。光る手袋をしているかの様に右掌が青白く淡い光を発した。

それをそのままレミリアのお腹の辺りに近づけた。すると、レミリアの靈力が僅かに膨れ上がり、彼女の全身を包み込む様に透明な膜が出来た。

「おおー……」

「これが、昨日言っていた靈力の膜ね。私の靈力に反応して体が勝手に自分の身を護ろうとしてるわ」

私は一旦右手を引っ込め、ふうと息を吐いて額の汗を拭う。

まさか上手く行くとは思わなかった。完全にぶっつけ本番だったので、どうせ失敗するだろうくらいの軽い気持ちだったのだが。

レミリアは、腕を振ってみたり手を閉じたり開いたりしながら、へえーとかほおーとか間の抜けた声を出していた。

「うーん……これ、自分の意思で出したり引っ込めたりは出来ないのかしら。霊夢の手が遠のいたら弱くなってきたし、このままだと勝手に消えちゃいそうなんだけど」

あんなにあっさり霊力の波を捉えた癖にその程度のことが出ないのか。

そのアンバランスさは元吸血鬼故なのだろうか。

「要は安定させれば良いのよね？」

じゃ、ちよっと荒技だけど……絶対に動いちゃダメよ？」

もう一度掌を翳し、さっきよりも更にレミリアに近付けた。

霊力同士が触れ合い、独特の音を立てながら火花を散らせる。

二秒程そのままで居ると、私の手が押し返される様な感覚を覚えた。レミリアの霊力膜が少しばかり膨らんできている。

「ねえ、コレ大丈夫なの……？　なんかカリカリ言ってるけど」

「あんたも見たことあるでしょう？　所謂グレイズって奴よ。

……うん、もう良いかな」

霊力膜が安定して来たのを見て、私は手を引き戻した。

私は今まで適当に生きてきて、全てが何とかなって来たのだ。ならば人に物を教える際も適当にすれば何とかなる。という私の直感には当たったようだ。

「今度は勝手に消えたりもしないようね。順調順調」

「それは良いんだけど、今度は引っ込められないんだけど……なんか疲れて来たし」

レミリアの顔には玉の様な汗がポツポツと滲み出ており、その疲労具合が窺える。かくいう私も涼しい顔をしているが、実は結構披露困憊だったりする。

幼い体で無理をするもんじゃないわね。

「体の外側に靈力を走らせてるのが今の状態ね。それを内側に引き込む様に……さっきの“自然体”を意識して頂戴」

またもや私の言葉が終わる前に意識を集中させ始めたレミリア。人の話は最後までちゃんと聞くべきでしょうよ。他人をとやかく言えないのは自覚してるけど。

「うーん……膨れ上がった靈力を抑え込むのが難しいわね」

何て事を言いながらもすっかり靈力を自然な流れに持つて行く事に成功させている辺り、流石である。

上手く行って何よりだ。私の指導の賜物ね。

ふうーとレミリアは大きく息を吐くと、全身から力を抜いた。

「吸血鬼だった頃はこんな面倒な事したことなかったのに……煩わしいわね」

レミリアが足を投げ出して腕を後ろに持つて行き、もたれ掛かるように上半身を反らせて体重を腕に預けた。

私もそれを見習ってダラけたポーズを取る。

「人間は元々弱い存在だからね。そうやって修行して力を付けて、漸く妖怪と渡り合える様になるのよ」

私は修行なんて殆どした事は無いが、それは敢えて黙っておく。

「意識して自然体で居ることの難しさが理解出来たわ……。見てよこの汗」

右腕を持ち上げてこちらに向けてきた。そんな物見たくもないからしまいなさい。

「でもまあ、コツは掴めたから練習すれば何とかなるわね。これは空を飛べる日も近いかもねえ……」

言つて、流す様な目でこちらを見やる。目は口程に物を言うなんて言葉もあるが、目よりもニヤニヤとした口元の方がレミリアの心情をぶつけて来る様だった。

“空を飛ぶ程度の能力”を持つ私よりも先に空を飛んでやろうとでも考えているのだろう。

確かにそんな事になれば私の面目は丸潰れである。私も少しは練習しようかしら。

「靈力が扱えるなら、少しは希望が見えてきたわね」

ついには床にゴロンと寝っ転がるレミリア。背中痛くないのだろうか。

「希望って何のよ」

「決まってるじゃない。幻想郷に帰ることが出来るかもしれないってことよ」

喜色満面といった表情で話すレミリアを見て、私は少しばかり胸が痛んだ。

ああ。そういえば、話していなかったな。

「この外の世界にもまだ妖(あやかし)や神霊なんかも残ってるかもしれない。そいつらが幻想入りする際に相乗りだって出来るかもしれないし、私達自身が幻想入りする事だって可能かもしれない。

幻想郷に帰りさえすれば、吸血鬼に、前世の姿に戻る方法だって見つかるかもしれないわ。

それにあなただってもう一度博麗の巫女として

」

「レミリア」

嬉しそうに話すレミリアの言葉を遮る為に、私は彼女の名前を呼んだ。

私の気持ちを正直に話せば、彼女を落胆させてしまったろう。

それでも、話さないわけにはいかない。

今後の為にも立ち位置は明確にしておくべきだ。

怪訝そうに此方を見るレミリアに向けて、

「私は、幻想郷に帰るつもりはないわ」

はつきりと自分の意思を告げた。

レミリアは目を見開き、信じられないといった表情で起き上がった。

何かを言おうとして口を開き、しかし何も言葉は出てこない。

対して私もレミリアの言葉を待つように何も言わない。

数秒の沈黙の後、レミリアが言葉を選ぶようにゆっくりと口を開いた。

「…………それはまた、べしつてっ？」

その言葉の裏にこちらの意見を尊重しようという意思が見え、私は密かに感謝した。

感情のままに掴みかかってこられても文句は言えないと覚悟していたのだが、私が思っていたよりもレミリアは理性的だったようだ。

ありがたい。ならば私も変に取り繕おうとせず、素直な気持ちを話そう。

「なんだかんだで、今の生活を気に入っているからよ。」

それに、今のお母さんにも少なからず感謝もしてるし愛情だってあるわ。

彼女を見捨てて私だけ幻想郷に行こうだなんて事は考えられないわよ」

私達二人が突如として行方不明にでもなったら、あの人はどんな気分になるだろうか。

私達を産んで、愛情を注いで貰い、ここまで育ててくれたあの人の、悲しむ姿など想像もしたくない。

それとも、幻想入りするに随って私達の記憶を失うのだろうか。

幻想郷は、忘れ去られた存在の楽園だ。そうなる可能性は高い。知らぬ間に子供を喪い、原因の分からない喪失感に苛まれるのだらう。

それはきつと、何よりも残酷なことだ。

「博麗霊夢としての人生に、未練は無いの？」

「無いと言えば嘘になるけどね。理を捻じ曲げてまで前世である『博麗霊夢』に返り咲こうとは思わないわ」

魔理沙や他の皆に二度と会えないというのは、勿論寂しいものがある。

こっちの人生を気に入ってる様に、前世での博麗の巫女としての人生だって勿論気に入っていたのだ。

人妖入り乱れる幻想郷。懐かしいなあ。

「今の事態が誰かの姦計だとしたら？ 報復……いえ、この“異変”を起こした何物かを退治しようとは考えないのかしら？」

「そりゃあ確かに腹は立つけどね。不覚を取った私が悪いのよ」

淡々と、飽くまで淡々と。

感情を込めてしまうと決心が揺らぎそつになるから。

いつから私はこんなにも弱くなってしまったのだろうか。

博麗霊夢だった頃は、こんな気持ちになったことなど無かったというのに。

「……それは博麗の巫女としての言葉か？ 今の 霊夢としての言葉か？」

立ち上がり、見下ろしながら睨みつける様に目を細めてくる。

言葉使いこそ鋭い物となっているが、その声は微かに震えていた。

「どっちも私よ。私の言葉よ。肩書きは関係ないわ」

努めて淡白に、感情に左右されないように平坦な言葉を放つ。

一拍置いて、もう一度ハッキリと告げる。

「もう一度言っわ。私は、幻想郷に帰るつもりはない」

「っ」

そんな私の言葉を受け、レミリアは苦々しげに下唇を噛んだ。

首を捻って私から視線を逸らす。

レミリアの肩が震えているのに気が付き、彼女の顔を見ないように視線を下に落とした。

「……か弱い存在になったから、異変を起こした妖怪を放っておくのか。」

力を失ったから諦めるのか。

博麗の巫女は、その程度の存在なのか」

私を責める為に紡がれたであろうその言葉は、吐き出す様な、とすれば泣き出しそうな、レミリアの心情を如実に表していた。

「……博麗の巫女としての、誇りはないのか」

問い詰めるようでありながら、縋るような言葉。

「私は一度、死んだのよ。理を捻じ曲げてまで、博麗霊夢に返り咲くつもりはない。それこそが博麗の巫女としての私の最後の矜持よ」

レミリアは脱力したように頷垂れ、

「そうか」とだけ短く言つと私のすぐ傍に腰を下ろした。

「私は、帰るぞ。何としてもな」

「そう」

私達の言葉はそこで途切れた。

それっきり口を開くこともなく、お互いの体温を感じながら二人で座りこんでいた。

6・駄目な母親

「何で魚一つ捌けないのよ!? あんた今いくつよ!」

「……二十歳そこそこくらいです。はい」

何故ボカす必要がある。

思わず張り上げた私の怒声に返ってきたお母さんの声は、張りもなく弱々しいものだった。

四苦八苦しながら鱗を取り除いているその姿を、私は台座の上で仁王立ちしながら見守っている。

綺麗な台所だった。

本当に綺麗な台所だった。

まるでつい先日引越して来たばかりかと疑う程に綺麗だった。

油はねも無く焦げも着いていない、真つさらなガスコンロ。

水垢一つなく、空の三角コーナーが鎮座した銀色に輝く流し台。

はつきり言おう。お母さんは料理したことが無い。

以前から薄々気付いてはいたが、我が家の食育事情は異常の一言に尽きる。

お母さんがスーパーで買ってきたお惣菜を、とりあえず冷蔵庫にぶち込んでおき「腹減ったら勝手に食べ」である。

私達の身長でも一人で開けられるように、態々小さめの冷蔵庫をもう一つ設置してあるのだ。

お陰様で電子レンジの使い方は完璧だ。オカズによって微妙に

違ってくる温め時間の調整も誰にも負けない自信がある。

離乳食が終わって自分一人で食べられるようになった当初は、「外の世界の食文化は変わってるわね」「ぐらいの認識であった。

しかし、「テレビ」とやらでドラマやアニメなる物を見ていると、その中で繰り広げられる食事シーンは私の知っている物と大差無かった。

そんなこともあって、私は意を決して、という程の事でもないが聞いてみる事にした。

「うちってさ、皆で一緒に食卓囲ったりしないの？」

朝ごはんと呼称したカップ麺を嚼るお母さんの手が止まる。

ちなみに、私は既に朝ご飯を二時間程前に済ませている。卵かけご飯。美味しかった。

「え？ いやー……面倒臭いじゃん？ 時間、合わせんの。

それに、あんたら、教えても無いのに、箸だって完璧に使えるし、一人でも大丈夫だろうなって……なあ？」

なあ？ じゃないわよ。

悪い事だという自覚はあるのだろう、しどろもどろな返答だった。

疑惑が確信に変わった。

我が家は異常だ。

そしてこの女はダメ親だ。
というよりもダメ人間だ。

思い返せば、この人自身も決まった時間に食事を摂るなんてこと

はしなかった。

真夜中に急に起きて来て、一人でもそもそも何かを食べているのを目撃したのも一度や二度ではない。

お母さんの食生活の乱れは捨て置くとして。

それを子供にも強制するのは親としてどうなのだろう。

幼児の食事を丸投げとは如何なものか。

私が黙りこくって考え込んでいるのを良いことに、麵噉りを再開したお母さん。

そんなお母さんの視線を此方に戻す為に、私はわざとらしく「はあ」と溜息を吐いた。

視線が此方に向いたのを確認し、私は両手の指を絡めて両肘を卓袱台の上に置いた。

「まあ、ね。気持ちは理解出来るわ。

他人に合わせて自分の時間を縛られるのは嫌よね。食事の時間なんて個人の自由だしね。もうこの際一緒に食べよう、とは言わないわ。

でもさあ、お母さん。

それでも、料理くらいはちゃんとした物作って頂戴よ」

お惣菜は確かに美味しい。けどもいつも同じ店で買ってくる物だ。レパートリーも限られてくる。

そして何より、私は何より耐えられないのは、

汁物が無い。

つまり、私は今世でお味噌汁を飲んだことがない。

「あー……料理。うん、料理ねえ……」

人差し指で頬をポリポリと掻き、視線を泳がせた。

おっ、こっち向けこら。

出来ないのか。出来ないんだな？

まあそうだろうとは思ってはいたが。

くそ、この女。どうしてくれようか。

もう良い歳だろうに今まで何して生きてきたんだ。

まあ、これだけ発達した文明があるのだ。料理なんて出来なくても別段困りはしないだろう。

幻想郷での常識に染まった私の感覚で、この人を非難するのは間違っているのかもしれない。

それでも、私の食に対するフラストレーションはもう限界だった。

「立ちなさい」

「……は？」

「立ちなさいつつつたの。買い物行くわよ。まずは書店ね。料理の指南書くらい置いてあるでしょ」

「シナンシヨ……？ え、なに、料理覚えんの？ 私が？ ……今から？」

「私も一緒にやるから。ね？」

笑顔でポン、とお母さんの肩を叩く。

「あ、はい」

「なら早く準備する！ ほら立って！」

完全に立場の逆転したやり取りだったが、意外にもお母さんは素直に従った。

私だったら四歳程度のクソガキにこんな舐めた態度を取られたら、確実に引つ叩いて泣かせている自信がある。

それをしないと云う事は、お母さんにも少なからず負い目があるのだろうか。

「ほらレミ姉も。出掛けるから準備して」

「んー……もうちょっと待って。後五枚だから」

未だ寝巻きのままうつ伏せで足をパタパタと上下させ、ジグソーパズルを組み立てていたレミリア。

その姿にイラつとした私は、股の間に足を滑り込ませ、その先にある尻を蹴飛ばした。結構強めに。

「ッ！ ちょ、何すんのよ？」

お尻を抑えながら涙目で跳ね起きたレミリアの頭をガシッと掴んで、ニッコリと微笑みかける。

「早く準備して？ ね？」

「あ、はい」

涙目な顔そのままに、筆筒へと向かう。

冷静になって考えればレミリアは何も悪くないのだが、そこはまあ、日頃の行いということだ。

私は既に余所行きの服装なので、何の準備も必要ない。
慌ただしく動き回る二人を腕を組んで見守ることにした。

「……ちょっと。お宅の娘さん、躰がなってないわよ。何とかしなさいよ」

「……あんたの妹だろ。手綱握っててくれよ」

姉と母の仲睦まじい会話が聞こえてきた。

家族仲は良好な様だ。

そして冒頭へ戻る。

本当に何も出来ない人だった。

まず、出汁というものを理解していなかった。

差し当たってお味噌汁を作らせようとしたところ、出汁も取らずにいきなり味噌を大量にぶち込もうとして慌てて止めた。

それも500gの容器丸まま入れようとしていた。どんな濃い味噌汁作るつもりだ。

そして今現在、魚を捌かせている。

背の小さい私は台座に乗ってその様子を見つつ、横からアレコレと口出ししている。

ちなみにこの台座、ホームセンターなる場所で購入してきた。1280円。相場が分からないので高いのか安いのかは知らない。

持って帰るのに苦労した。主に母が。

幻想郷には海が無い。

前世で私は川魚しか捌いた事が無かったので内心心配ではあったが、海の魚も大して違いは無かった。

多少戸惑いはしたが、本屋で買って来た「お料理入門」と言う本が写真付きで分かりやすく書いてあったので、この分なら問題は無さそうだ。

「ここに包丁入れて、スーッと切ってサッよ。

ほら、やってみて」

「擬音が多くて分かんねえよ……手本見せるよ手本」

言って、「こちらに包丁を突き出して来た。……刃の着いた方を向けて。

その事をキツ目に注意しつつ、お母さんから包丁を受け取ってゆっくりとやって見せた。説明付きで。

うん、川魚と大して違いは無い。

「四歳の娘に刃物持たせるって親としてどうなんだろうなあ……」

「何ブツブツ言ってるのよ、ちゃんと聞いてんの？」

「はいはい聞いてますよー」

親としてもっと見直すべき点はあるだろうに。

「……ってか何でそんなに上手いの？ほんとに初めてかよお前」

その言葉に、私の手がピタッと止まる。

しまった。張り切り過ぎて怪しまれちゃったか。

どう言い繕おうか、と考えていると背後からフォローが入った。

「霊夢はよく料理番組とか見てたからね。それで覚えたんでしょう」

うん、まあ嘘ではないし信憑性もある良い言い訳だ。

後ろを振り返り、感謝の意図を視線で送ろうとレミリアを見ると、

切り落とした鯡の頭をツンツンつついて遊んでいた。地べたで。水とか鱗とか血とか色々飛び散っている。

……後で掃除させよう。

「いやあ、美味かった！ 久しぶりに温かみの有るモン喰ったよ！」

あっはっは！ と、豪快に笑いながら缶ビールとやらを煽るお母さん。麦種の一種らしい。

普段あまりお酒を飲む人では無いのだが、「たまには良いのよ」だそうだ。

「魚を生で食べる習慣って無かったけれど、美味しいのねえ……」

と言つのはレミリアの言葉。それには私も同感だった。

あっちの魚は寄生虫とかが怖いからね。火を通した物しか食べた事がない。

「霊夢ちゃん霊夢ちゃん、明日は肉じゃがが食べたいです！」

……結局、お母さんに料理を覚えさせるのは断念した。

というよりも途中で音をあげて逃げ出し、寝室に引き籠もってしまっただ。

そして、料理が完成したのを見計らって部屋から出てきた。幼児に火を扱わせて、目を離すとは……。

この女はもう駄目だ。

結果として、今日の夕餉は全て私が作ってしまった。

大して豪勢な物でも無かったけど、出来栄は上々。味も悪く無かった。

相変わらず料理を覚える気の無さそうなお母さんを見る限り、今後私が作ることになりそうだ。

自分の作った物を「美味しい」と言っただけで食べて貰えるのも、まあ

正直悪くはない。前世では宴会でもない限り味わえなかった感覚だ。

おっと、一応フォローしておこう。

内心色々毒付いたりもしただけど、お母さんの事は嫌いじゃない。料理以外の家事は一通りやってくれてるしね。

親としては駄目だけど、根はそう悪い人でも無いのだ。

「肉じゃがね、はいはい……」

無意識に自分の頬が釣り上がるのを感じながら、私は適当に返事をした。

明日から、食事は賑やかになりそうだ。